

注目の新刊!

ライフサイエンス選書

放射線災害と向き合って

—福島に生きる医療者からのメッセージ

編集：福島県立医科大学附属病院被ばく医療班（現 放射線災害医療センター）

放射線災害は、21世紀に生きる医療従事者、国民すべてにとっての課題である。爆発した原子炉、放射性物質が拡散した土地。そこで懸命に闘う福島の医療者たち。危機管理の新たな視点を含め、彼らの思いを綴る。福島に住む方々はもちろん、全国の方々にもぜひご一読いただきたい。

A5判、274ページ 定価2,310円（本体 2,200円+税5%） ISBN 978-4-89775-306-5 C1047



[主な内容]

第1章：あのとき、何が起こったか

史上2番目の大規模原子力発電所事故が福島で発生した／先のみえない原子力災害対応／初めて体験した現実の被ばく医療／絶望から苦悩、そして再生へ……

第2章：放射性物質を知る

放射線の種類と単位について／体内での放射性物質の臓器特異性／急性障害と晩発性障害／自然放射線……

第3章：原爆とチェルノブイリ原発事故からわかっていること

長崎、広島の前爆投下でわかっていること／原爆による急性期の主な放射線障害／被ばく時年齢と甲状腺がんのリスク／チェルノブイリ原発事故当初の状況／ポーランドにおける安定ヨウ素剤服用の実効性……

第4章：低線量放射線の健康リスクについて

福島第一原発事故による災害と低線量被ばくの現況／空間線量率はどうだったか／住民の避難状況／体内に蓄積された放射線量の測定／原爆とチェルノブイリの被災からの低線量被ばくの教訓／被ばくが及ぼすメンタルヘルスへの影響／日常生活で無理なくできる低線量被ばく対策……

第5章：県民健康管理調査とサポート体制

「福島県民健康管理調査」の概要／甲状腺検査は震災時18歳以下の全県民が対象／こころの健康度・生活習慣に関する調査／妊娠婦に関する調査／サポート体制の中核を担うコールセンター……

第6章：【座談会】震災と原発事故、こころの健康にどう向き合っていくか

「妊産婦のアンケート調査」から考える／震災後の診療における困惑／「こころの健康度調査」からみえること／子どものPTSDをどう考えるか／こころの問題を予防するために……

第7章：【座談会】放射線問題とリスク・コミュニケーション

リスクをどう捉えるか／科学的な数値とこころの動きとの関係／人々はどこで納得するか／リスク・コミュニケーションのポイントはどこか／一般人がリスクを評価するときのポイント……

第8章：「想定外」から未来へ—危機管理のあり方、リスクとの共存—

危機管理のあり方／「想定外」の正体は何か？／危機を2つの軸で考える—リスクマネジメントとクライシスマネジメント—／クライシスマネジメントの改善／科学と「想定外」／モノログからダイアログへ……

強い衝撃を受けたのは第1章の「あのとき、何が起こったか」という救急医の生々しい現場報告であった。暗中模索の中で行わざるを得なかった被ばく医療の大変さを正しく実感することができた。本書では多くの頁を割いて広島、長崎の原爆による放射能障害、チェルノブイリの原発事故の例と福島の今回の事故とを比較しながら、被ばくの程度や健康リスクが述べられている。「福島県民健康管理調査」についても紹介されており、この調査結果が低線量放射線の健康影響に関して世界が参考とする重要なデータとなることを期待したい。

(高久史磨 日本医学会会長/
福島県立医科大学会津医療センター準備室長)

医療者の文章を読んで感じることは、その言葉が明瞭であることです。自分自身が直接に見聞きし体験したことを、修辞に頼ることなく簡潔で率直な言葉で表現している。実感にもとづいて自信をもって言えることを、他人の言説に頼ることなく自分自身の責任において断定的に表現している。そういう明瞭な文章の迫力と説得力が胸を打ちます。

日常の診療に結びつくこととして学びが多かったのは、第7章「放射線問題とリスク・コミュニケーション」。特殊な状況にあっても、普通のコミュニケーションにおいてなすべきことを確実に行うことが基本であることを再認識しました。

(福田正人 群馬大学大学院医学系研究科 神経精神医学教室)

福島第一原発事故に関する本はたくさんありますが、これは読むべき本だと思います。

第1章では、災害対応の苦悩と問題点がひしひしと伝わってきました。第8章では危機管理の立場から、第1章で示された問題点が発生した理由がとても理論的に書かれています。どのような本からもこのような内容は得られませんでした。

(救急医 Amazonブックレビューより)

東京電力福島第一原発事故に對峙した福島県立医大の医師らが苦悩と葛藤を描いた。——医師らの多くは県内に家を持ち、子どもや配偶者を抱える。家族の安否を気遣い、被ばくへの恐怖と戦いながら、患者の治療に明け暮れた。「見捨てられたのではないか」「パニック寸前」など、インフラが整備された日本での出来事とは思えない言葉が並ぶ。原発事故の悲惨さを改めて痛感し、風化させてはならないという思いに駆られる。——いま、福島の復興に役立ちたい、と同大を志願する受験生、県内の病院勤務を望む若手医師が増えたという。未来に希望を感じた。

(「毎日新聞」書評記事より)

原発事故後の被ばく医療に携わる福島医大の医師らが、事故発生後の医療現場や県内の状況などをまとめた書籍が発行された。——医師らは、現在も続く放射線対応や通常の診療などで忙しい合間を縫って執筆に当たった。序章を担当した同大の大戸斉医学部長は「——科学に根ざした客観的事実を積み重ね、百年後にも評価される内容を目指した」と話している。

(「福島民報」紹介記事より)

ご注文方法 ● お近くの書店 ● 下記発行元 ● Amazon や楽天などのインターネットショップ

 ライフサイエンス出版

URL <http://www.lifescience.co.jp/>

〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町8-1
TEL. 03 (3664) 7900 FAX. 03 (3664) 7734 / 7736
e-mail info@lifescience.co.jp